

じょっぴんワード

教化の現場

「畳のやわらかさは乳幼児にとって安心なんですよ。」中央区健康・子ども課の坂下恵さんは親子でいっぱいになった広間を見つめながら語る。

中央区に十数か所ある子育て支援の会場で一番子どもが集まる場所が「8☆8プラザ」(北8条徳生寺八島昭雄住職)である。

絵本の読み聞かせグループ(常本代表)からの誘いに八島住職、坊守さんが賛同し、区の子育て支援係の協力を得、地域の子育て広場として4年目を迎える。

スーパーや病院に置かれた案内チラシを見て遊びにくる地域の親子が利用する子育て広場に住職から出された条件は「ご本尊の扉は開けてください」の一つだったそうである。その願いに対し、集いの最後に住職の10分間のお話が支援者から求められた。

驚かされるのはボランティアスタッフの多様性である。地域の協力者やご門徒だけではなく、歯科衛生士から美容師までが子育て広場を支えている。乳幼児の髪の手切り方の指導から指しゃぶりが卒業できない子どもの出っ歯の心配にも応じる。赤ちゃんを抱き上げる機会が少なくなっているであろう年配のご門徒の笑顔が印象的で、三世代が交流し、育児相談にもさりげなくのっている。初めてのお母さんはピンクの名札、2回目からは黄色とささやかな気配りに母親どうしも声がかかり易い。

その日は46組の親子が遊びに来ており、地域から信頼されている活動にお寺の存在意義と可能性が見えてくる。



広間のあちらこちらで、親子のスキンシップが微笑ましい

宗門は今や厳粛な懺悔に基づく自己批判から再出発すべき関頭にきている。懺悔の基礎となるものは仏道を求めてやまぬ菩提心である。

宮谷法合 『宗門各位に告ぐ(宗門白書)』

あるものは、戦時下での宗門の競争への協力責任であり、宗門がこれまで勤めてきた御遠忌の歴史である。御遠忌を勤めるという事はその歴史を受け継ぎ、その歴史が背負ってきた課題を問い、そして如何に処してきたのかを検証し学んでいくことであろう。

寺川師は「歎異としての同朋会運動」と題して、「私たちの教団の課題である同朋会の運動。これは一体どこから生まれてきたのであるのかというところ、この歎異の心からではないでしょうか。歎異の心

が、同朋会運動という形を求め、展開したに違いないのです」*⁽⁴⁾と述べている。同朋会運動が歎異の心から生まれたという事は、その同朋会運動を生み出した七百回御遠忌こそ「親鸞聖人の精神に帰り、そこから出発し直そう」という願い*⁽⁵⁾を孕んでいたといえる。即ち、同朋会運動が生み出されたその背景にあった歴代の御遠忌は、懺悔の営みであったといえるのではないだろうか。

復する運動である」という先達の言葉をいただくとき、浄土真宗の僧侶と名のついている私は、本当に親鸞聖人の名のもとに浄土真宗の教えをたしかに受けてきたといえるだろうか。そして、常に門徒とともに親鸞聖人の信心を、異なることなく語り合ってきただろうか。ことと省みると、そこに懺悔せずにおれないということがある。

* (1)「戦争とその傷」『念仏の僧迦を求めて』寺川俊昭著 参照
* (2)「宣言」『真人』創刊号
* (3)『近・現代真宗教学史研究序説』水島見一著 参照
* (4)* (5)『念仏の僧迦を求めて』寺川俊昭著

真宗同朋会運動50年に向けて

その検証 再出発(一)

教化本部 古卿 誠幸

1945年(昭和20)8月、15年におよんだ戦争が敗戦によって終わった。しかし、戦時下にあった宗門は大きく戦争に没入していったことにより、真宗の伝統はほとんど壊滅状態となり、それまで各地方の寺院で行われてきた真宗独自の法要行事の多くが消滅するという大きな損失を被った。さらに都市部の多くの寺院は戦災によって本堂が焼失又は破壊されたといわれる。そのことを寺川俊昭師は「そして敗戦の廃墟のなかに残ったものは、『神も仏もあるものか』というはき捨てるような言葉であり、それが表わすような精神の荒廃だったのであります。これが、戦争によって、既成教団が得た、唯一の成果でしょう。その精神的荒廃、すなわち宗教に対する一種の嘲笑的態度、あるいは無関心は、そのまま戦後を生き続けて現在に至っているといわねばならない」*⁽¹⁾としている。

(昭和24年4月18日、25日)はまたたく盛り上がりや欠けたものとなった。その上当時の金額で3千万とも4千万ともいわれる膨大な借財が残ったという事からも、当時の低迷した宗門の様子を窺い知ることが出来る。

しかし、結果的にこのような現状から、宗門改革の声が高まり、1950年(昭和25)の宗議会議員選挙には、後に真宗同朋会運動の提唱者となる訓覇信雄師をはじめ多くの清沢満之の願いを受け継いだ真人社の会員が当選し、今まで異安心とされてきた清沢門下の一人である暁鳥敏師が宗務総長となった。ここに真人社結成の宣言文にある、「真宗仏教の本姿を見失い、因習と情気の中に安易な逃避を求める限り、かかる課題を解きうるものでないことはいまでもなく、民衆の同朋教団たる真生命を歪曲する形骸の衣をいさぎよくぬぎすてぬ限り、自滅の道を辿ることは歴史の必然である」*⁽²⁾という清沢満之の精神の願いに立つた宗政が胎動しはじめた。

「宗門白書」が発表された5年後の1961年(昭和36)4月14日から28日まで親鸞聖人七百回御遠忌が100万人の参拝者を得て盛大に厳修され、その翌年7月真宗同朋会運動が正式に発足した。真宗同朋会運動は、まさに親鸞聖人七百回御遠忌によって生み出された。そして、この同朋会運動を生み出した御遠忌の背景として

暁鳥内局の後、末広愛邦内局が議会議場一致で成立したが、宗祖七百回御遠忌予算がホテル建設という記念事業に走る膨大な予算であり、教学軽視の施策であることから改革派真人社出身の訓覇師ら議員団の反対によって、御遠忌特別予算が不成立となり末広師は辞職した。*⁽³⁾そして1956年(昭和31)2月、宮谷法合師が宗務総長となり、同年4月御遠忌お待ち受けの基本精神として『宗門白書』が発表され、同朋会運動の基本理念が示された。さらに特筆すべきは「明治のわが宗門に、清沢満之先生がおられたことは、何ものにもかえがたい幸せであった」*⁽⁴⁾と大谷派が徳川封建教学の桎梏から脱皮し、真宗の教学を、世界的視野に於いて展開し得た」と初めて清沢教学を位置づけ、宗学と教学との分離を表明し、教学の充実と自信教人信の誠を尽くすべき人材の養成を課題としたことである。

* (1)「戦争とその傷」『念仏の僧迦を求めて』寺川俊昭著 参照
* (2)「宣言」『真人』創刊号
* (3)『近・現代真宗教学史研究序説』水島見一著 参照
* (4)* (5)『念仏の僧迦を求めて』寺川俊昭著